



浦島伝説

令和6年6月7日

第8号

昨年（2023年）10月、東アジアサッカー連盟会長に選出された田嶋幸三氏は、かつて埼玉県の高豪である浦和南高でキャプテンを務め、第54回全国高校サッカー選手権（1976）の決勝で2ゴールを挙げ優勝、翌年の第55回大会でも優勝し2連覇を成し遂げた選手です。

元サッカー日本代表選手であり、日本サッカー協会会長も務めました。著書『「言語技術」が日本のサッカーを変える』に載っているU-17日本代表の監督をしていたときのエピソードを紹介します。



54回大会の浦和南対神戸、シュート放つ田嶋幸三氏



2001年、田嶋監督はサッカーのU-17（十七歳以下）の日本代表を率いて、ヨーロッパ遠征に出かけました。日本チームの選手たちは、ドイツ・フランス・イタリアなどの外国の高豪チームの選手たちと同じホテルに泊まっていた。

朝、監督が朝食をとるために食堂に向かいました。その時、監督はあることに衝撃を受け、絶望の底に転がり落ちたといいます。

監督は、何に衝撃を受けたのでしょうか？

それは、他の国の選手と日本の選手の違いでした。他の国の選手たちは、みな、髪の毛を整え、揃いのポロシャツをズボンのなかにきちんとしまった格好で食堂に現れていました。当然、靴もしっかりと履いています。その姿には、国の代表であるという意識・誇りが表れていました。



日本代表の選手はどうだったのでしょうか？

ジャージの裾のジッパーをあけた状態、寝癖のついたボサボサの髪の毛で足元はサンダルでポケットに手を突っこんだまま、監督に「ちーっす」という挨拶で現れたのです。その姿は、他国の選手と比べて幼くひどくだらしない格好だったといいます。

監督は、その態度や服装、あいさつの違いに、瞬時にして「勝負あった」と感じました。つまり、試合をする前に負けたと感じたのです。実際、試合でも日本は大差で負けてしまいました。

よく日本人は海外の人から礼儀正しく、きちんとしており親切でマナーが良いといわれ賞賛されるということを聞きます。もちろん、そういう面もあるでしょう。日本だけでなく外国でも、代表に選ばれる選手たちは日頃から「いいか、お前たちがチームのシャツを着ていることで、周りの人たちからどう見られているか、そのことを考えろ」と堂々と言われているそうです。

服装を直したらサッカーが強くなるわけではありません。しかし、服装の乱れは気持ちが整っていないことの表れです。日頃から意識を高め緊張感を持ち続けている選手と、気を抜いて生活をしている選手。ここぞという時にどちらが力を発揮できるかは明らかです。



所属するチームの看板を自ら背負っていることを自覚し、日常から見た目も含め、生き方を正して行動することが大切なのです。

詫間中の代表として、みなさんはどのような行動・服装をしていくべきか？

